
山の中の呪われた家

岳石祭人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

山の中の呪われた家

【Nコード】

N7265M

【作者名】

岳石祭人

【あらすじ】

怪奇現象が多数報告されている山奥の村の一軒家に大学の研究チームが調査に入り、一夜を過ごす。翌日、家は警察の捜査員が多数押し掛けることになる。研究チームのメンバーに、何が起ったのか？（こちらはハードゴア・スプラッターバージョンです。先に「お化け屋敷の裏側」を読んでいただき、物足りないコアなホラーファンの方のみお読みください）

前編：調査（前書き）

（＊アテンション！…こちらはくれぐれもホラーが苦手な人は読まないように！）

前編：調査

その家の前には黄色い薄暗い街路灯の灯る木製の電柱が立ち、今はもう使われていない古い番地のプレートが打ち付けられている。

目の高さよりちょっと低い位置に、尋ね人の張り紙がされている。風雨にさらされ、すっかりひび割れて白い毛羽立ちが固まっている。白黒の顔写真はまともに判別できなくなっている。

男性ではあるらしい。

名前はかろうじて「佐藤」とだけ読める。

「失踪した男性は佐藤 徹、昭和28年7月から行方不明になっています。当時40歳。佐藤には病気がちの母親がいて、二人暮らしでした。息子の失踪について母親のはっきりした証言は残っていません。佐藤の失踪届を出したのは村の人間で、家で一人で残っていた母親は町の病院に入院させられましたが、1年後に亡くなっています。」

……ということ間違いないですね？ 佐藤 透研究員？」

「嫌な振り方をするねえ、麻田君」

佐藤研究員、29歳、は苦笑して女子学生の麻田を睨んだ。漢字が違うとはいえ行方不明者と同名というのはあまり気持ちよくない。まして、今目の前に建っているこの家は、数々の怪奇現象の報告されている、いわゆる「心霊スポット」なのだから。

いささか顔を悪くしている佐藤を教授の安室 新三郎（あむろにいさぶろう）、46歳、はいささか馬鹿にした冷静きわまりない目で見て言った。

「ただの偶然だよ。君が研究対象ならその精神状態を喜んで観察させてもらうところだが、研究する側がそうした迷信的な情緒不安定を呈しているのは困るよ？」

佐藤研究員はむっとして言い返した。

「当たり前です。馬鹿馬鹿しい」

「よろしい。では、鍵を開けてくれたまえ」

「僕が持ってます」

学生の佐々木が前に出て、懐中電灯で照らしてもらって鍵穴に鍵を差し込み、キリキリ軋み音を立てさせて鍵を回した。ガチャツと鍵が開き、佐々木はガタガタ戸を揺らしながら鍵を引き抜いた。

「何年くらい人が入ってないのかなあ？」

戸に手をかけ、思い出したように振り返って訊いた。

「開けていいですか？」

「ちよつと待つて」

佐藤研究員はビデオカメラを構え、

「いいよ」

と言った。

「お邪魔しまーす……」

佐々木がガタガタ敷居に引っかけながら戸をスライドさせた。

数年来の闇が、口を開いた。

今この売りに出されている空き家に入ろうとしているのは都会の大学の心理学の研究チームである。安室教授のゼミでは最近増加傾向にある大災害におけるPTSD「心的外傷後ストレス障害」を主に研究している。その一環で人間心理の中でもとりわけ「恐怖」を取り上げ、その発生のメカニズムを研究している。

夏と言うこともあり、堅物の安室教授のちよつとしたジョークなのだろう、この山奥の村のことさら寂れた一軒家に「肝試し」にやってきたわけだ。

もちろん遊びに来たのではない。

この家は57年前に家主が失踪し、4年後、その母親も亡くなっていることもあり、市に接收され、競売を経て不動産屋に買われ、一般向けに売りに出されたが、その後30年ほどの間に5人ほどに買われたが、すぐに出てしまい、売れる度にけっきょく地元の不動

産屋に販売の委託が戻ってきて、その後、現在に至るまで、けっさよく買い手は付いていない。今回調査に入るに当たってその不動産屋に所有者に連絡を取ってくれるよう頼んだが、連絡は付かず、住所も電話番号も変わってしまっ、まさに幽霊物件になってしまっている。

今、地元の人間には「幽霊屋敷」として認知され、小さな村でも外れにあるこの一軒家には、特に夜になると、村の人間は決して近寄ろうとしない。

家が鳴く、と言う。

まるで新たな犠牲者を求めるように。

家が泣く、と言う。

家に呪われて命を落とした者の怨念が苦しむように。

窓の中を白い人魂が飛ぶ、と言う。

窓に女の泣き叫ぶ顔が浮かぶ、と言う。

その家に入った者は、精神に異常を来してしまう、と言う。

そうした怪奇現象を、

安室教授のゼミの研究チームは、その現象のメカニズムを解こうと調査にやってきた。

時刻は、8時を過ぎたところだ。

家の前はすっかり耕作放棄された荒れ地が続き、家の背後は雑木林が広がっているが、野生の植物の侵攻は家の後ろ3分の1をすっかり樹木の陰に覆ってしまっている。

家は、平屋である。

今回の調査メンバーは、

安室 新三郎……教授

佐藤 透……研究員

麻田 真美……学生

佐々木 功太……学生

森屋 美香……学生

の5名である。

ところが、ではいよいよ家に入ろうかと言うところで、学生の森屋美香が後込みしてしまった。

「済みません、教授、やっぱりわたし無理です。すごく気持ち悪くて、どうしても体が震えちゃって、入れません」

と、真つ青で怯えきった顔で言った。道化役の佐々木が

「森屋は幽霊が見えちゃう人だもんね？」

とふざけた口調で言った。佐藤研究員がすかさず、

「こらっ。まあこの雰囲気では、女子では、無理ないな。教授、一人くらい欠けても差し支えありませんよね？」

とフォローした。教授は興味深そうに森屋を観察して、言った。

「家に近づくとき持ち悪くなると言う証言もある。幽霊の正体はプラズマだ。気持ち悪くなると言うのは敏感な体質のせいで、おそらく低周波が電磁波の影響だろう。」

ああ、いいよ。では、仕方ない、車で休んでいたまえ」

ここまでは教授のミニバンで来ている。運転手は佐藤だ。

「朝まで一人つきりになるかも知れないが……、大丈夫かね？」

そちらの方が心配だというように教授は尋ねた。森屋はむしろほつとしたように、

「この家に入るよりはましです」

と軽く笑った。

「では、行くよ」

懐中電灯で中を照らし、玄関へ入っていく仲間たちの背中を見て、森屋は、

「あの……。気を付けてください……。ね？」

と、教授に遠慮しながら注意した。女一人になってしまった麻田真美が『バイバイ』と笑いながら手を振った。

「電気は……と……」

一番手の佐々木が壁を照らして、電灯のスイッチを入れた。パチ

パチツ、キーン、と、怪しい音を立てながら暗い電球がついた。
「おお、セーフ。昭和の製品は頑丈だなあ」

と感心しながら廊下上がった。

最後にカメラを構えて佐藤が玄関に入り、カメラごと森屋を振り返り、

「それじゃ、留守番、気を付けてね？」

と言った。森屋は青い顔に笑顔を作り、

「はい」

と答えた。

「それじゃ、しばらくここ開けておくから、何かあったら大声出すんだよ？」

と、佐藤は戸を開けたまま廊下に向かっていった。

外の窓には続々明かりが灯っていく。

森屋は電柱の尋ね人の張り紙を見て、……ブルツ、と震えると、怖そうに20メートルほど離れた所に止めてあるミニバン向かって小走りに駆けていった。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

怪奇現象が多く報告されるのは深夜2時、丑三つ時である。
平屋の間取りは、

玄関

廊下

トイレ

8畳の和室

4畳の和室

台所

廊下

風呂場

納戸

となっている。

チームは手分けして各種計測器を各部屋廊下に設置していく。
そして4人になってしまったチームは、

トイレ前 佐々木

8畳の和室 安室教授

台所 麻田

風呂場と納戸を結ぶ廊下 佐藤研究員

と、一人ずつスタンバイして丑三つ時を待つことにした。
科学者である彼らに

「人が居ては幽霊が現れない」

などナンセンスである。人が居ることによる条件の変化はあるに
しろ、その人によって怪奇現象の報告がなされているのだから条件
としてはむしろ人が居た方がいいだろう。

彼らには、怪奇現象の起ることがウェルカムであり、その現象
の科学的検証がテーマである。

怪奇現象に対する恐れなど、ナンセンスだ。

0時を前に、教授の居る8畳間だけ常夜灯に切り換え、後は電灯
を完全に切った。

家人は寝静まった。

さあ、

幽霊たちの時間が、始まる。

.....

カタカタカタ、と、暗闇の中で2槽式洗濯機のふたが鳴った。

バキバキバキツ、と、廊下で木が裂ける音が響いた。

トイレの底から、ゴゴゴゴゴゴ、と狭いところに水が引き込まれるような音が上がった。

女の顔のような影が部屋の窓に映った。

・ ・ ・ ・ ・

3時半を過ぎて、8畳間で灯りがつき、それを合図にそれぞれ8畳間に集合した。

家には最後の居住者が残っていた生活用品がそのまま残っている。この8畳間にはテレビに、棚の上のラジオに、ダイヤル式の電話もそのまま残っている。

安室教授は意気揚々と言った。

「さて、諸君はどうだったかな？ わたしは面白かったよ。何が起こったと思う？

この」

と電灯に照らされた室内の様子の写真にガラス窓を指し。

「窓に、なんと、女の幽霊が現れたのだ」

上機嫌にニヤニヤ笑う教授を教え子たちは怪しんで見つめた。

「本当だぞ？ ここに大きくおぼろな、しかし女の顔が写ったのだ。しかもその女は、影だけだったが、あっちこっちと顔の向きを変えて、まるでこの部屋を外から覗いているようだったんだぞ？

ははは。

さて、このカラクリが分かるかな？」

佐々木が窓を開けて外を窺った。そうして、なあんだ、と言う顔をしてこちらを向いた。

「木の枝が伸びてます。こいつの影でしょう？」

教授は上機嫌の顔で、

「それでは20点くらいしか付けられないな」

と採点した。今度は麻田が外を眺め、言った。

「向きを変えたと言っんですから、虫じゃないですか？ カナブンがブンブン飛び回っていますよ？」

「枝と合わせて、40点という所かな？」

今度は佐藤研究員が挑戦した。

「光源が必要だ。月明かりではそこまではっきりした影は写らないでしょう？ 向こうの山の道を走る車のハイビームが、ちょうどここに当たるんじゃないですか？ それにこの湿り気、霧が出ていたんじゃないでしょうか？ 霧がスクリーンになって、虫の飛ぶ姿が拡大されて写り、ちょうど人の顔のように見えた、と言ったところじゃないですか？」

教授は佐藤を指さし、

「合格」

と満足そうに言った。

「実験で再現できなければ断言は出来ないが、おそらくそういうことだろうね。さすが佐藤君だ。」

君たちはどうだった？ 何か面白い怪奇現象には巡り会えたかな？

ハイ、と佐々木が手を上げた。

「トイレからごぼごぼ音がしましたよ？ けっこう不気味でしたよ？」

麻田は

「洗濯機のふたがガタガタ動きましたよ？」

佐藤は

「廊下でビシッとかかなり大きな音がしました」

と報告した。教授は頷きながら聞き、

「水と低周波だろうね」

とそれで全て解決できるように言った。

「まず廊下の木が裂けるような音は、お馴染みのラップ音というや

つだ。正体は、木の密度の違いによる収縮の差がきしみになったものだ。木は湿度によって伸び縮みするからね。

次にこのトイレは、昔ながらのくみ取り式だ。村の他の家とはつくに水洗化されているようだがね、ここは持ち主がはつきりないまま水洗化から取り残されてしまったのだろう。ずいぶん古いから貯水タンクが傷んで、底が割れてしまっているのじゃないかな？ おそらく、今溜まっている水は雨水が流れ込んだ物と、地下水がわき上がってきた物だろう。

洗濯機のふたを振動させた低周波は、おそらく、この家の地下を流れる地下水脈が発生させた物だろう。潮の満ち引き同様、地下水も水位が変化して、ちょうど先ほどの時間に低周波を発生させるような空洞が出来るのだろう。トイレから聞こえてきた音もその地下水の水位の変化を表した物だろう」

学生二人はほうと感心した。さすが教授、恐怖の怪奇現象も科学理論で一刀両断である。

解説が終わってしまうと教授は途端につまらなそうに肩をすくめた。

「ま、こんなものだな。物理的に種明かししてやれば『なあんだ』と拍子抜けしてしまう。それが何故人に恐怖を与えるか？ それは心理学の研究テーマだが、どうもここもたいしたサンプルになりそうもないな。」

ま、今回は君たちにちょっとした肝試しのプレゼントだ。楽しんでもらえたかな？

さて、もうじき明るくなるだろう。機材を片づけて都会に帰るとするか。田舎の蚊は強力でたちが悪いな」

と、教授は赤く腫れた首筋をピシャツと平手で叩き、開いたガラス窓を閉めた。

麻田が

「じゃあわたし車に森屋さんの様子見てきます」

と言い、佐々木が「あの」と手を上げ、股を押さえて気持ち悪くもじもじした。

「トイレ使ってかまいませんかねえ？ 実はずっと我慢してるんですよ」

「かまわんだろう」

と教授は呆れたように言った。佐々木はえへへと笑い、

「大きい方なんですよ。なんなら皆さんからお先に」
と言った。

「あたし絶対パス。こんな所で用足するくらいなら外の藪の中で蚊にお尻を食われる方がまだましだわ」

と、廊下に出ていき、

「俺もパス」

と佐藤も苦笑しながら言った。

「教授はよろしいですか？」

「よろしいからさっさと行きたまえ」

教授は蠅を追い払うように手を払い、佐々木は

「えへへ、じゃあ遠慮なく」

と、そそくさ廊下に出ていった。

玄関の方から、

「あれえー？ なんか戸、開かないわよ？ ちよつと、佐々木い、開けてよ？」

と麻田の声が聞こえ、

「あー、ごめん。俺、便意催しちゃった」

と、佐々木はボタンとドアを閉めた。

まだ「ちよつとー」と麻田の怒った声が聞こえ、佐藤は苦笑し、
「じゃ、僕が行って来ます」

と廊下に出た。

後編：結果

「どうした？ 鍵は開いてるだろう？」

麻田はガラスのはまった格子の引き戸を両手に持ってえいっえいっ
とやっていたが、

「なんかすっごい立て付け悪いですよ？ 閉めたの佐藤さんでしょ？ 開けてくださいよお？」

と、諦めて手を放した。

「えーと、閉めたの俺だったかな？」

車に残った森屋のために開けたままにしてやり、その後閉めたのが自分だったかどうか、思い出せない。

「どれ」

佐藤は靴を引っかけ、取っ手に手をかけた。引く。

「あれ？ なんだこれ？」

立て付けが悪いどころじゃない、まるでまんべんなく釘付けされたようにびくとも動かない。

「このっ、このっ、」

力を込めて開けようとしてもまるで動こうとしない。試しに反対側も棧に手をかけ引いてみたが、やはりびくともしなかった。

「どうなっているんだ？」

それこそ夜気を吸って木の棧が膨張してしまったかと思ったが、これだけびくともしないのはおかしい。いや、科学信者としておかしいことなんて何もないはずなのだが……。

「うぎゃああああっ」

凄まじい悲鳴が上がり、佐藤と麻田はビクッと振り返った。
佐々木の入っているトイレだ。

「うぎゃああああっ、ぎゃああああああっ」

佐々木は凄まじい悲鳴を上げ続け、ドアをドンドンと乱打した。
「なんだ？ なにごとだ！？」

怒ったように言って教授も廊下に出てきた。

佐藤は靴を脱ぎ散らかして駆け上がり、トイレのドアノブを掴んで回した。

ガチャガチャッと、鍵が掛かっているようで開かない。

ドアは中から乱暴に乱打され続けている。悲鳴は

「ぎゃあああつ」

と凄まじく上がっている。佐藤は大声で呼びかけた。

「佐々木君！ 鍵を開けてくれ！ ドアが開かない！」

ガチャッと鍵の開く音がして佐藤はドアを勢いよく開けた。

床から一段上がって、尻と脚を丸出しにした佐々木が和式便器に跨る姿が横から見られる。

「うつうつうつ……」

佐々木は蛾のように蒼白の顔でこちらを向き、両手で壁を押さえ、足を踏ん張っているが、顔をガタガタ揺らして歯をガチガチ鳴らして、全身をブルブルガタガタ震わせていた。

「ど、どうした？……」

佐藤が恐る恐る訊くと、佐々木は震える声で歯をカチカチ言わせながら言った。

「し……、尻……、尻の穴に……、手……、手を……、突っ込まれた……」

「なにい？」

佐藤は半信半疑で後ろから佐々木の尻を覗き込んだ。

「……」

佐藤は呆気にとられた。たしかに、青白い、人の腕らしき物が、手首まですっぽり佐々木の肛門に突っ込まれている。

「……なん……っだ、これ？」

「どうしたんだ？ どうなってるんだ？」

横から教授が割り込んでくると、

「ぎゃあっ！……！」

佐々木が凄まじく叫んで、ぺたんと便器の穴に座り込むと、

ズボボボボボボオツ、

何か吸引するようなすごい音が上がり、

「ぎゃあああああああっあああっああっ……あ………」

……」

佐々木は叫ぶと白目を剥き、動きを止めると、だらしく開いた口から血を溢れさせてだらだら垂らし、ガクン、と前に倒れた。

ピツと、水が頬に跳ね、佐藤は反射的に目を閉じた。改めて見ると、こちらに向けて露出した佐々木の尻は、まっ赤に濡れて、開ききった肛門から、赤黒い長い物が飛び出し、便器の穴の底へ続いていた。元々黄色く汚れていた便器も、まっ赤に染まって、まだだらだらと赤い液体を真っ黒い穴の底へ滴らせていた。

佐藤は、

「……おい……佐々木？……おい？………」

と呼びかけたが、佐々木はまったく反応しなかった。

「佐々木……、死んで………」

キャアーーーーッ、と悲鳴が上がった。

「どうして？　なんで？　佐々木い？　キャアーーーーッ、キャアアアーーーーッ……！」

麻田が腹の底から絞り出すように悲鳴を絶叫した。

佐藤は立ち上がり、麻田の所へ向かった。近づくと、

「うわああっ、きゃあああっ、来ないでえーっ！」

麻田は悲鳴を上げて、再び玄関の土間に下りると、開かない戸を必死に開けようとした。

「なんでよお!?　なんで開かない!?　開いてよおおーっ! ! ! !」

力一杯引いて、指を滑らせて外し、また力一杯引く。びくともしない。

「麻田……」

佐藤はふと、自分のワイシャツの胸がまっ赤に濡れているのに気付いた。顔を触ると、触った指の腹がべっとり赤く染まった。

佐々木の尻から噴きだした血をかなりまともに浴びてしまったようだ。

「教授……」

佐藤は安室教授を振り返った。トイレで佐々木の尻を子細に調べていた教授は、佐藤を見て、

「どうやら内蔵を出してしまっただけらしい」と言った。

「出してしまった、らしい?」

冗談じゃないと佐藤は教授に食ってかかった。

「トイレの穴から伸びた手が佐々木のケツの穴に突っ込んで、内蔵を引きずり出したんですよおっ!」

教授は青い顔で佐藤を睨んだ。

「トイレから手だと?　馬鹿馬鹿しい。ナンセンスだ」

「じゃあ」

佐藤は玄関で必死になって戸を開けようと頑張っている麻田を指さして言った。

「あれはどうなんです?　なんであんなに必死になっているのに戸が開かないんです!?」

「それは、木が膨張して、食い込んでしまっているのだよ」

「はっ、馬鹿馬鹿しい!　教授。現実を見てくださいよ!?　佐々木は尻から内蔵引きずり出されて殺されて、我々は、なんだか分からない力で、この家に閉じ込められてしまっているんですよおっ!」

「ばっ、馬鹿馬鹿しい……、殺されただと………」

教授はハッと思い出して尻ポケットから携帯電話を取りだして通話ボタンを押した。

「駄目だ……。おかしいな、ここは圏外にはならなかったはずだが………」

佐藤も自分の携帯電話で試してみた。圏外マークが出た。

「ほら見てください？ やっぱり我々は閉じ込められたんですよ」

「い、嫌、そんな、こんな所………」

麻田がフラフラと佐藤の横を通り過ぎ、部屋へ入っていった。

「麻田君！」

佐藤は追った。

「閉じ込められるなんて嫌……、裏口から出てやるわ………」

麻田は部屋を2つ通り抜けて台所に出ると、端に置かれた洗濯機の隣のドアに向かった。

ガチャガチャノブを回し、

「ああ、開かない！ なんでえっ！………」

佐藤が代わって回してみたが、ドアノブは途中で止まって、完全に回りきらない。なんだ鍵が掛かっている。横になったつまみを縦に起こそうとしたが、さび付いているのか、まったく動かなかった。

「ああ、嫌あ、出口、どこか出口はないのお？」

麻田は再びさまよいだし、佐藤もどうすれば出られるんだ？と焦りながら考えた。

と、

ジリリリリリリリ、

と、けたたましく電話が鳴りだした。

ジリリリリリリリリ、

佐藤は部屋に戻り、

いよ？ 我々の科学はもう、ここでは通用しないんですよ？」

佐藤はさつきから教授にタメ口をきいて、ずいぶん失礼な態度をとっているような気がするが、どうでも良かった。元々このいけ好かない教授は大っ嫌いだった。

佐藤は教授を睨み付け、

「ここは彼女の家なんだそうですよ」

と教えてやった。教授は面食らった顔をした。

「彼女って、誰のことだ？」

佐藤は教授を無視し、どうしたら「彼女」に許してもらってここを脱出できるだろう？と考えた。

ゴトン、ゴトゴト、

と、梁かまたは天井を通じて物音が響いてきて、ボタン、と何か床に投げ捨てる音が聞こえた。

台所の向こうの廊下に出ると、ボタン、と投げ捨てる音が先の納戸から聞こえてきた。

コトン、と投げ捨てられて廊下にはみ出てきた物を見て、佐藤も、さしも現実主義者の教授もギョツとした。

人形だった。

裸で、かつらも取られた丸坊主のフランス人形が、投げ捨てられ変な形に手足を曲げて、ひねった首でこちらを向いて、薄汚れた顔で、青い瞳の大きな目で恨めしそうに二人を見ている。

ボタン、と戸の内側ではまだ何か投げ捨てている。

佐藤は床に転がるフランス人形を気味悪そうに見ながら開いている戸に向かった。

ボタン、と段ボールのみかん箱が投げ捨てられ、開いた口から詰め込まれた着物が見えた。

中で麻田が棚から次々物を投げ捨てていた。ぶつぶつと、

「出口、出口、出口、」

とつぶやいている。

「おい、麻田君、こんな所に出口なんてあるわけないよ」

佐藤が声をかけても麻田はつぶやきながら作業を進める。ポリタンクをポイポイ捨て、石油ストープをガッシャーと投げ捨てた。

ポイ、と、また一体フランス人形が投げ捨てられて佐藤の足元に落ちた。今度のは綺麗なカールした金髪をして、青いドレスを着て、蜘蛛の巣を被りながらニコツと佐藤に笑いかけていた。

2段の棚の上の方からすっかり荷物は消えて、向こうにベニヤの壁が露出した。麻田は棚の上に体を乗り上げ、両手をバタバタ伸ばして、

「ああー、出口があー、出口があー……」

とわめいた。恐怖ですっかりおかしくなってしまうているようだ。かわいそうにと眺め、振り返ると、教授はビデオカメラを構えて撮影していた。

「教授。何してるんですか？」

ドスの利いた声で非難するように言っても教授は液晶ファインダーを見ながら撮影を続け、

「我々は科学者なんだ」

と言った。

「今は訳が分からずパニックになっれていても、これには必ずカラクリがあるのだ。後で検証するために記録を取っておかなければ。それに、君、佐藤君、我々は今、」

怖い顔で佐藤を睨んで言った。

「まさに我々が研究し、治療に役立てようと言う心的外傷を受ける状態のまっただ中にいるのだよ？ 研究者として、これを記録せずにどうすると言うのだね？」

佐藤も怖い目で睨み返したが、教授は、おそらく、科学者であることを貫くことで、この恐怖に対抗しているのだろう。

そう、

恐怖だ。

佐藤は、怖くて堪らない。

ザア、と水音がして、カコン、と音が響いた。
なんだ？と二人は顔を見合わせ、音のする、

風呂場に向かった。

灯りのついた風呂場で、ザラメガラスを通して、女が体を洗っていた、

ザラメに輪郭を拡散し、艶めかしい肌色が、白い泡にまみれ、ザアと、湯船から桶にくんだお湯を背に流した。

これは幻に違いない。

水はともかく、湯気の立つお湯など何十年も人の住んでいないこの家にあるわけがない。

教授はファインダーを覗き、撮影している。

カメラに映る物が、果たして幻なのだろうか？

もしかして自分たちは、数十年前の時間に取り込まれてしまっているのではないだろうか？

佐藤はじつと見つめながら、若い女だろうか？、と思った。ガラリと戸を開けて確かめたい誘惑に駆られた。

すると、女の方がハツとこちらに気付いたように顔を上げ、背を丸めて胸を隠し、

パツと、中の灯りが消えて、ガラスは真っ黒になった。

静かで、なんの気配もない。

佐藤が手を伸ばしてガラス戸を引こうとすると、目の前のガラスに白い顔が浮き上がった。

「わあっ」

佐藤は驚いて退いた。

ザラメに歪む白い顔はギョロリと目を剥き、佐藤と、撮影を続ける教授を睨んだ。

白い顔が引っ込み、

ガラ、ガラ、ガラガラ、と、ゆっくり戸が引かれ出した。

白い腕の一部が見えて、佐藤は鳥肌立って後ろを向くと教授の腕

を掴んで逃げ出した。

「佐藤くん！…」

「殺されますよおつ、佐々木みたいにつ！」

納戸の方に向かうと、向こうからも

「ひいっ」

と悲鳴を上げて麻田が転げるように飛び出てきて、一目散に佐藤の後ろまで逃げてきた。

何か来る、佐藤は立ち止まり、じつと斜めに開いた向こうの戸を見つめた。

鮮やかな青い色が見え、佐藤は啞然とした。

青いドレスを着た、くるくるの金髪の、等身大のフランス人形が現れた。

人形だ、陶器の顔をした。青いガラスの瞳をした。

身長は140センチくらいで、顔の大きさは人間の子どもと変わらない。

歩み出たフランス人形は、ゴリツと、何かを踏んづけたことに気付いて、両手でスカートの裾を持ち上げ、

「アラマア」

とかわいい声で言った。彼女が踏んづけたのは仲間の、裸で禿げた汚れたフランス人形だ。

「汚らしいゴミが落ちているわ」

と、彼女は裾を持ち上げたまま、革靴の足を振り下ろし、バリッ、

と仲間の顔を踏みつぶした。

「オホホホホホ」

バリッ、バリッ、ガリッ、と踏みつぶし、グリグリと体を踏みにじり、割れた顔面から転がり出たガラスの目玉を

「セーノ」

と狙いを付けて、バキッ、

と見事に粉々に踏み砕いた。

「オホホ。後で婆やに片づけさせましょう」

フランス人形は自分をじっと見ている観客たちに気付き、

「アラ、ゴキゲンヨウ」

と、可愛らしく挨拶した。

ウフフ、と笑う顔に、佐藤はゾツとして後退し、逆に教授は前に出た。

「不思議だ……、一体どういう仕組みだ？……」

教授はカメラを構えたまま近づいていき、

「教授！」

佐藤が警告する声も耳に入らないようで、

「それはなんですか？ 8ミリカメラかしら？」

フランス人形はレンズを覗き込み、

「ウフフ」

と愛想良く笑った。

「ワタシってキレイでしょ？ 映画を撮ってくれたお礼にダンスをして差し上げますわ」

と、教授の両手を取り、

ああ、と教授がカメラが変な方向に向いてしまつのを気にするのもお構いなしに、

「タリタリラ〜〜ン」

フランス人形は歌いながら、教授とフォークダンスを踊り、教授の手を握りながら華麗にターンし、

「ギャッ」

教授の腕は無理矢理ひねり回され、一回転し、

「タリタリラ〜〜ン」

フランス人形は掴んだ教授の腕を肩からブチッと引き抜いた。

「ぎゃああああああっ」

腕の肩口はワイシャツの腕の中でぶら下がり、見る見るぐっしょり濡らし、ダンスに振り回されて、ブシュッ、ブシュッ、と染み出

して嘖きだし、フランス人形のドレスと顔を赤く染めていった。

ゴトンとカメラが床に落ち、ぐったりした教授はフランス人形に振り回され、引きずる足に、フランス人形は乗り上げて、

「アッ」

ボタンと顔面から床に倒れた。

「ウウ……」

起き上がったフランス人形の陶器の顔に、ピシッと目の上にひびが走っていた。

立ち上がったフランス人形はグリッと目玉を動かし、

「ヘタクソッ！」

と教授を叱責し、ぐったりして動かない片腕の教授を引っ張り上げ、

「エイッ」

と、首を引き抜いた。血が火山の噴火のように嘖き上がり、天井をバチバチ叩き、ザアアーッと辺り一面降り注いだ。

「オホホホホホ」

人形は赤い悪魔の顔で笑った。

「このオモチャも、もういらない」

目玉がグリッと動く。

「ひ、ひ、ひ、ひい……」

佐藤の背後で麻田がジリジリ後退し、

「うっ」

とうめいた。

佐藤はすっかり固まった顔でゆっくり振り返った。

麻田が上を向いて口からブクブク赤い泡を吹いていた。

麻田の後ろには髪が濡れた女が立っていた。

「うっうっ……う……」

麻田は白目を剥いてガクンと首を下にすると、ドローツと泡混じりの血を吐き出した。

ズル、ズズズズ、と、女の握る包丁から突き刺された背中が抜け落ちていき、麻田は床にガクガクと膝を付き、膝をバネに伸び上がるように前のめりにバツタリ倒れた。

包丁を握る女は風呂上がり濡れた裸の胸に白いバスタオルを巻いていたが、麻田の背中から噴き上がった血で真っ赤に濡れていた。女は、

「あははははは、あはは、あは、あは、あはははははははははは」

と狂ったように笑い、麻田の腿に馬乗りになると、グサツ、グサツ、と、何度も包丁を振り下ろし、血しぶきを浴びている。

佐藤は、

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

ガクガク震えながら、そうつと笑う包丁女から離れた。視界に青い色が揺れた。

「オモチャ」

フランス人形が赤く染まった顔でニコニコ笑いながら歩いてくる。・・・・・・・・・・・・・・・・

佐藤は、スルリと、台所に逃れた。

ここの裏口のドアは駄目だ。

4 畳の和室に入る。

窓がある。が、ここはびっしり浸食した雑木林の幹でふさがれている。

8 畳の和室に入る。

ああ、窓だ。こっちは表側だから飛び出て逃げられる。急いで取り付き、鍵を回し、引いたが、先ほどは普通に開いていた窓が、今は玄関の戸のようにびくともしない。

ああ、ちくしょう。佐藤は部屋を見渡し、古い、重たいラジオを掴み上げた。窓ガラス向かって振りかぶり、

すると、窓ガラスいっぱいにはわあっといくつも人間の顔が張り付いた。

「ひいつ」

佐藤は思わずラジオを取り落とし、角がまともに右足の甲に当たり、声も上げずに苦しんだ。

窓いっぱい顔は、口を開け、口、鼻、目から血を流し、恨めしそうな顔で佐藤を見つめていた。

佐藤は、気が萎えた。

「あははは、あはははははははは」

女はまだ麻田の背中を突き刺しているのか、笑い声を上げ続けている。

「ミイツケタツ！」

声がして、佐藤はビクウツと震え上がった。

「アラ、ザンネン、いませんでしたわ」

声はどうやら台所にいるようだ。

「ジャア……、ココカシラ？」

佐藤はヒイと飛び退いた。隣か？ ああ、いけない、とにかくどこかに隠れなきゃ、もう日が昇って明るくなるはずだ、お化けは、明るくなると消えるのだから。

どこだ、どこだ、隠れる場所。

ここだ！

佐藤は、隠れた。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

スツと戸が開いた。

「見いつけた。」

朝になった。

村の人間が車のガラス戸をコンコンとノックした。
運転席で頭を抱えて丸くなっていた森屋美香は「ヒイ……」と飛び上がった。

コンコンとノックされ、中年のおじさんの顔を見て、見開いた目でひどく恐ろしそうにした。

そんな顔で見られておじさんの方がギョツとした。

「おい、あんた、大丈夫かね？」

大声で呼びかけると、森屋はパワーウィンドを下げ、じいつと無言で見つめた。

「大丈夫か？ 他の人らは？」

村では偉い学者の先生たちがお化け屋敷を調査に来ると話題になっていた。しかし夜中調査の様子を見に来ようと言う者は村には一人もいなかった。

ようやくすっかり明るくなってやってきたおじさんに、

森屋は震える手で前方の家を指さし、

「iiiiiiii、家……、しししし、調べて……」

とやつの思いで言った。

「ええー？」

おじさんは顔をしかめて家を見やった。

「あんた、どうしたの？ なんで一人なの？」

「わわわ、わたし、ここ、怖くて、ははは、入らなかったの」

「なんだ、最初から入らなかったの？ まあ、それが正解だわな。

ええー……。しょうがねえかあ……」

もうこんなに明るいいし、お化けも出ないだろうと、おっかなびつくり玄関に入っていたおじさんは、

すぐに、

「ぎゃああああああああっっっ」

と悲鳴を上げ、転げるように飛び出してくると、車中の森屋など

まるで眼中になく、集落目指して一目散に走っていった。

2時間ほど後、家は県警の捜査員でごった返していた。

まず、トイレで裸の尻を便器に突っ込んだ男子学生が見つかり、彼は股から腹部まで刃物で切り裂かれて内蔵をぶちまけられていた。風呂場の狭い浴槽には背中をめつた刺しにされた女子学生が膝を抱えて底に横たえられていた。

捜査員を一番驚かせたのが、

納戸の棚の上段に、教授の、首、胴体、2本の腕、2本の脚、が両脇を段ボールに挟まれてきれいに並べて収納されていたことだ。

表の車の女子学生によると家にはもう一人、男性研究員がいたはずだ。

彼らはここで夜中、怪奇現象の調査を行っていたという。

捜査員の一人が、

「頭のいい連中がそんなくっだらねえことやってるからおかしくなっちまうんだ」

とこれ見よがしに言った。一人だけ見つからない男性研究員が目下最重要参考人として行方を捜されている。

また一人、8畳間の捜査員が何げに、

「おい、ここはどうなっているんだ？」

と押入のふすまを開いた。

瞬間、部屋にいた捜査員や鑑識官らがぴたっと動きを止めて押入の下の方を見つめた。

「どうした？」

ふすまを開いた当の捜査員がひょいと下を覗き込むと、

「わあっ、」

驚いて腰を引いた。

暗がりですっと、

男性研究員が膝を抱えて座っていた。

その手には血のこびりついた錆びた包丁を握りしめ、カッと目を

見開いた物凄い顔をして、

何かブツブツつぶやいていた。

「恐怖は科学で説明される。恐怖は科学で説明される。恐怖は科学で」

大学の研究員、佐藤 透、は3人の殺害容疑で緊急逮捕された。

しかし彼はいつまでも同じ言葉を繰り返すのみで、犯行に関する証言はまるで得られず、けっきょく精神病院に入れられ、監視されることになった。

現場で見つかったビデオカメラには、家の内部を撮した映像と、わーわーぎゃーぎゃー悲鳴を上げるメンバーたちの声が収録されているだけで、これもけっきょく事件の真相説明にはほとんどなんの役にも立たなかった。

人が恐怖を感じるメカニズムは現代科学でもまだ完全には説明されていない。

事件のあった家は、神主に鎮魂と清浄の儀式を執り行ってもらった後、取り壊すことが決まったそうだ。

END

後編：結果（後書き）

（＊こんな物書いちゃってごめんなさい。「お化け屋敷で科学する」
はとっても楽しかったです）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7265m/>

山の中の呪われた家

2010年10月9日18時21分発行